
IS インフィニットストラトス AS <アナザーストーリー>

混沌ソウル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニットストラトス AS<アナザーストーリー>

【Nコード】

N4306S

【作者名】

混沌ソウル

【あらすじ】

これはIS インフィニット・ストラトス のもう一つの物語である

プロローグ(前書き)

これはR15なのでムリな方、15未満の方は即回れ右をしてください。

プロローグ

プロローグ

それは……一瞬の……出来事だった。

俺は……妹を守った……自分にとって守りたかった者の一人だった。

けれども……その代償として……俺は……一度死んだ……。

今から数時間前

とある中学校の一人の男子生徒が校門を出たところだった。

彼の名前は黒金宗（クロガネソウ）

中学3年

成績はいたって普通だが運動神経、体力は学年一でスポーツ万能である。

性格は少々熱血でクール

そしてそのせいか時々下駄箱にラブレターが何枚か入ってる位モテル（本人は気づいてない）

彼の大切なものは家族と友達
そして趣味は、・・・・・・・・

・・・<ISS>だった。

黒金宗（以下：宗）「さてと・・・帰ったら宿題すませて家事をすませるか・・・・・・・・」

彼の家<黒金家>は父は外国でおらず、母はいつも家事で父が帰ってくるのを待っているのだが、最近熱を出して寝込んでしまい。妹は家事が出来ない（しかも破滅的に）。父も今日帰ってくるので、結果家事は自分でやらなければいけないのである。

宗「今日の夕飯何にしようかな？今日は父さんが帰ってくる日だから今日はお好み焼き（父の好物）にしよう。」

ちなみに家事と料理の腕はなかなかのものである。

そんな一人話を話していたら目の前に見たことがある一人の少女がいた。

？「お兄ちゃん！おーい！」

宗「おう真由（まゆ）！迎えにきたのか！」

黒金真由

宗の二つ歳下の妹である。

性格はおっとりしているが、怒ると怖い

がそれでも彼女は宗と同様、家族を大切にしている子である。

真由「ねえお兄ちゃん、今日の夕飯何？」

宗「今日は父さんの好きなお好み焼きにしようと思ってるがそれでいいか？」

真由「おーひさしぶりのお好み焼きだー！お兄ちゃん、つぎは負けないよ！」

黒金家はお好み焼きがある日はどいつが多く食べるか競うことについての間にか伝統的になっていた。

宗「ははは、俺的にはまず父さんを超えなきゃな」

ちなみに黒金家連続で多く喰えたのは、父だった。

真由「あー確かにね。」

周りから見ればごく普通の兄妹の会話にしか見えなかった。

そう……あれが来るまでは……。

宗は真由といっしょに買い物を買ってそのまま帰ろうとしていた。

真由「ねえお兄ちゃん。」

宗「何だ真由？」

真由「まさかお兄ちゃん・好きな子いないよね・・（顔黒）」

宗「ええ！？／＼そ・・そんなわけねえだろ！！／＼／」

真由「ふーんそうなん・・」

ギユウウウウウウ！！

真由「え？」

宗「危ない！！」

この音が聞こえたとき・・俺は・・・何も考えてなかった・・・
・妹を守りたい・・その気持ちに嘘偽りはなかった・・・
気が付いたら俺は空を飛んで・・その後・・・地の落ちた・・・
この時・・俺が最後に見たのは涙でくしゃくしゃになった妹の泣き
顔と大粒の涙と降り注ぐ雨だった。

そう・・この時・・俺も妹も分かったことがある・・・
たった今・・・

俺が死んだ。

宗「ここは・・・？」

気が付いたら彼は真っ白な空間にいた。

その後に徐々に空間が空と海に変わった。

?「よう」

宗「!？」

彼が振り返るとそこにはなんと自分がいた。

宗「え!・・・俺!？」

?「え?ああ、これは仮の姿。この姿でもないと話せないだろ。」

宗「え・・・ああなるほど・・・ところで・・・お前だれ」

?「よくぞ聞いてくれた!」

宗「テンションあがった!？」

?「俺はこの世界を作った人・・・言い換えれば<神>のよう

なものだ。まっ俺のことは<シン>ってよんでくれ。」

宗「あ・・・そうですか・・・ところで・・・しんさん？」

シン「ああ<さん>はいいよ呼び捨てでいいから」

宗「あ・・・ああわかった・・・ところでシン、ここは何処なんだ？」

シン「ここはお前の心の中。いまのお前の心だよ。」

宗「俺の・・・心の中？」

シン「だってお前・・・一度死んだだろ」

宗「あっそっか！俺真由を守ろうとして・・・死んじやっただん
・・・」

シン「あれは交通事故だったよ。事故を起こした車が雨でスリップしてそのままお前と真由ちゃんの所に突っ込んで来ちゃったんだよ
ね」

宗「じゃあ俺はどうすればいいんだ？」

シン「そこからが本題だ。・・・お前・・・転生してみないか？」

宗「転生ってそれってつまり生き返る代わりに人格と記憶がリセ
ットするんだろ！」

シン「一言でいえば生まれ変わるだがな。ただしお前の場合<特別
>だぞ。」

宗「<特別>って?」

シン「転生は転生でも<異例の転生>をするんだよ。」

宗「異例の転生って!?!」

シン「一番の特徴は転生前の記憶と人格をそのまま受け継がせるんだよ。」

宗「まじか!?!」

シン「ただしそれ以外(体の体形と顔は除く)の転生先と個人情報はこちらで変更させてもらうよ。」

宗「え……ていうか転生先ってどこ!?!」

シン「……<ISS>といえはわかるかな。」

宗「あ……えっと……わかった。」

二人が会話してるうちにかれは転生先の世界に行った。

次回に続く

プロローグ（後書き）

まさかの二つ同時の連載とはこちらももおどろきだ。だれの影響だ？

まいつか。

感想まっています。

結論

転生前と変わらないところは、名前と性格と体の体形と顔（ついでに興味）

変わったところはISに関するすべての知識がすべて頭の中に入っていることと生年月日と保護者と過去である。

生年月日は10月10日で歳はとある少年と同じ年でどつやらかれはとある会社の息子ということになっている。

ちなみに会社名は・・・<クロガネカンパニー社>で社長は、また後説明する。

現在

彼（以降：宗）はとある学校の転校と入寮の準備をしていた。

転入・入寮手続き、着替え、筆記用具、教科書・ノート等をバックに入れていた。

宗「ふう・・・とりあえず転校の準備はこれでよしと。あとは・・・アイツ（シン）待ちか・・・。」

ピンポーン！

宗「ん？誰か来たのか？」

宗はドアホンの音を聞いてそのまま玄関に来た。

宗「はい！どちら様で……」

来た人は……

シン「おはよー……！調子どうだい!？」

……シンだった。

宗「シン……お前声でかいぞ。近所迷惑だろ。」

シン「おつとすまねえ俺としたことが失敗しちまったぜ。まあいい（宗：いいのかよ）。ところで俺がここにいる理由は分かるよな。」

宗「……出来たのか……俺の専用機が……」

シン「おうよ！ところで準備は出来てるか？」

宗「問題ないすでに出来ている」

シン「よし、それじゃあ荷物をもってこい、まずはわが社クロガネカンパニーに行くぞ。」

宗「ああわかった。」

宗は返事をした後に荷物を取りに部屋に戻ってその後には玄関をでた。

そう会社の社長であり宗の保護者はなんとシンだった。

玄関の鍵を閉めて玄関の前にあるリムジン乗って行くことにした。
ただそのリムジンは普通とちがって、

宗「……………長!」

見た目は十メートルはありそうなくらい長かった。

執事「宗様なにをしていますか？早くお乗りください。」

宗「あ……ああ。」

宗はリムジンに乗ってそのままクログネカンパニーに向かった。

クログネカンパニー社（の研究室）

そこには漆黒の黒と血の赤をまとったISがあった。

宗「シン……………これが……………」

シン「ああ、これがお前の専用機だ！全スペックがとある天才の手製ISと同じ位でしかもこれは今までのISを越える俺様手製の第四世代型ISなんだ。」

宗「これも、第四世代なのか」

各国ではまだISは第三世代の試験機が出来た段階だったので第四世代のISはある天才がつくった一機以外は今宗とシンの目の前
にある機体しかないのだ。

宗「でもこれ・・・展開装甲をもっていないように見えるけど。」

シン「展開装甲はもっている・・・ただ、まだ使えない状態だ。」

宗「でもそれじゃあ第四世代とは呼べないんじゃないのか？それに展開装甲はいつになったらつかえるんだ？」

シン「専用機コイッは第四世代だぜ・・・『なぜ第四世代って呼べるのか』『なぜ今は展開装甲は使えないか』はこいつで戦っているときにわかる。」

宗「じゃあこいつの名前は？」

シン「まだ決まってない。名前は宗おまえが決める。」

宗「・・・わかった。(後で考えないとな)」

その後専用機のフィッシングとパーソライズを更新させた。

約数時間後

宗「ふう・・・つかれたー。」

数時間の間に宗はフィッシングなどを終わらせた後にISの訓練などをしていた。

その為宗はかーなりつつかれてる

シン「訓練は終わったか？終わったなら着替えて<IS学園>に向かう準備をしる」

宗「わかった。・・・ふう」

宗は疲れててもそれを我慢してそのまま準備をしていた。（ちなみに宗のISの待機モードの形は色は違つがとある少年と同じ形だった）

IS学園の寮の宗の部屋

本来寮の部屋は二人一組で過ごすのが基本だが宗はシンの会社の特権で自分用の部屋を用意してもらった。

宗「ここかぁ・・・俺の部屋は・・・」

？「はあ〜つかれた〜」

宗「ん？この声・・・隣からか・・・男のようなこえがしたが・・・もしかしてあの男か？」

宗は自分の部屋を後にして隣の部屋にきた。

(ノック音)

？「ん？ノック音？」

宗「すいませーん隣に入寮した者ですがどなたかいますかー？」

？「(入寮つてもしかして新しい転校生かな？)はい！今行きまーす。」

ドアが開いた瞬間ドアの内側にはとある少年がいた。

その少年は……織斑一夏(おりむらいちか)であった。

つづく

転校の準備（後書き）

いきなりネタバレ紹介コーナー

宗の専用機

武器：ブラックソード・ショルダーガン・キャタピラレッグ・ライ
トニングレッグ・シヨベルアーム・ドリルアーム・シールドアーム・
マグネットアーム・レッドアームズ・マルチウイング

アンケート

今、宗の専用機の名前を考えています。次のうちどれがいいでしょ
う？

1、血の騎士（ブラッティ・ナイト）

2、赤武者（あかむしや）

3、黒騎士（くろきし）

4、その他（僕が考えた名前以外の名前）

アンケートの回答&感想まっています。

驚きと幸福と不幸（前書き）

数日ぶりです。

てか・・まだ宗のISの名前が考えてねえ。

驚きと幸福と不幸

一夏の部屋の前の廊下

この時宗は驚く気配を見せなかったが一夏自身は、

一夏「男!？」

すごく驚いてた。

それもそのはず、本来ISは一夏以外女しか使えない。そのため一夏が知るかぎりIS学園には男が一人しかいないのだ。

宗「驚いたか？織斑一夏。」

一夏「あつああ驚いた・・・っていうか何で俺の名前を？」

宗「だつてお前は世界で最初にISが使える男だから知らない人間は少ないと思うぞ。」

一夏「お・・・俺ってそんなに有名人だっけ？」

宗「知らん」(キツパリ)

一夏「やっぱり」

宗「そういえばまだ自己紹介がまだだったな。俺の名前は黒金宗。『宗』って呼んでくれ。」

一夏「宗か・・・よろしくな」

一夏と宗はそのまま右手で握手をした。

一夏「そういえばお前、ルームメイトは居るのか？」

宗「いや・・・いないぞ」

一夏「え!？」

宗「ふっふっふっ会社特権というやつで俺専用の部屋を用意してもらったんだ。」

一夏「マジ!？」

一夏は嘘かほんとか確かめるため宗の部屋に来た。

宗の部屋

そこには、一夏じゃなくてももうらやましい部屋があった。

ベットはキングサイズ。デスクも一人分。ならびに丸いテーブル一つとイスが二つもあり。それだけでなくなるとテレビもある。まさしくどこかの貴族というカンジがする部屋だった。

一夏「うそ・・・すげー!」

さすがにすごすぎたのか一夏は啞然としてしまった。

宗「ああ・・・ならびにトイレもあるぜ。」

一夏「マジ!?!」

本来寮の個室にはトイレが無くあるのは廊下の両橋にある女子トイレだけであった。つまり一夏はまともにトイレをする場所が無いのに、宗は個室にトイレがあるのでその心配がないのだ。

宗「ああ俺の部屋のトイレ使いたかつたら使ってもいいぞ。俺が知る限り男でも使えるトイレは俺の部屋こしかないから。」

一夏「あ・・・ありがたい」

宗「・・・?そつえばお前なんか疲れてるように見えるがどうしたんだ?」

一夏「ああ・・・じつは・・・」

一夏の話によると、一夏達は昨日まで臨海学校に行っていた。

その臨海学校中に外国が開発中だった。第三型世代IS

<シルバリオ・ゴスペル>通称『福音』が暴走してそれを一夏とその仲間達が迎撃した。が、途中で一夏達は命令違反をしたため丁度今日著罰用トレーニングを受けた後だったそうだ。いったいどんなトレーニングを受けたかはそれはまた別の話。

宗「(なんか一夏・・・トレーニング以外の疲れがあるように見えるが)それはそうとお前・・・臨海学校楽しかったか?」

一夏「ああ楽しかったよ。（あの日の夜は除くけど）」

宗「そっか・・・俺も行きたかったな・・・そういえばそのブレスレット・・・色は違うけど俺と同じだな」

宗は一夏のブレスレットを指したあと自分のブレスレットを見せた。

一夏「それって・・・もしかしてお前・・・俺と同じ専用機持ち？」

宗「てことはそちらもか」

一夏「じゃあお互いによろしく・・・」

ドンー！！

突然下から爆発音が聞こえた。

一夏「なんだ！？いまの音！？」

宗「下からだ！行ってみよう」

一夏「ああ」

一階

そこでは黒い煙出ていた。

宗「黒い・・・煙？」

驚きと幸福と不幸（後書き）

感想まとめてます。

オリジナルIS設定 『ライジングジョーカー編』（前書き）

一夏「ん？・・・なんなんだここ？」

宗「この話のオリジナルISを分かりやすくするところらしいぞ。」

一夏「つまりここを見ればオリジナルISはどんなのかわかるのか。」

宗「そう言うことだ。・・・もともと第二話のくいきなりネタバレーコーナーでははしょりすぎてわからんからな。」

一夏「言えてる。」

オリジナルIS設定 『ライジングジョーカー編』

ライジングジョーカー <轟く切り札>

使用者：黒金宗

クロガネカンパニー社長のシンが開発した近接攻撃と機動の両方を特化した第四世代IS。全スペックが現行ISを超えている。

筈の紅椿とは違い防御に使う装備が一つしかない。したがって防御の少ない部分は攻撃と機動の方に使っている

一時期は第三世代ISとしてリミッターを付けられていたが第十部でそのリミッターが外れる。

カラーは漆黒の黒と血の赤。

武器

黒い剣（ブラックソード）

ツウアイハンダー
西洋大剣を用いた黒い剣。

普通なら両手でなければ扱うのは難しい両手剣だが、本人の鍛錬とISの腕力があれば片手だけでも扱える。白式の雪片仁方と同様、バリアー無効化攻撃をする際には剣が展開する。ただしこの剣のバリアー無効化攻撃は雪片仁方とは違い単一仕様能力の能力で生み出してるものではなくこの剣がもともと持っているものである。

赤い両腕（レッドアームズ）（能力不明）

ショルダーガン

両肩に装備されるライジングジョーカーの遠距離攻撃の一つ

実弾を使用するマシンガンタイプ
攻撃力は低いが連射力はかなり高い。
弾はエネルギーから生成して作ることが出来る。

シヨベルアーム（能力不明）

シールドアーム

左腕に装備されるライジングジョーカーの唯一の防御手段
そのうらにはシャルロットのリヴァイヴと同じ盾殺し（シールド・
ピアース）がついている。

複数の翼（マルチウイング）（能力不明）

雷の足（ライティングレッグ）（能力不明）

キヨタピラレッグ（能力不明）

マグネットアーム（能力不明）

ドリルアーム（能力不明）

ワンオフ・アビリティ
単一仕様能力

不明

オリジナルIS設定 『ライジングジョーカー編』（後書き）

これからもコレを更新します。

不満があってもこれについて感想は書かないと約束してください。

クラスメイトは一夏(かれ)以外女

翌日の午前9:55

1-1の教室

ここが一夏の教室である。

ここには一夏以外専用機を持っている生徒は四人いる。

篠ノ乃 篤(しのののほうき)とセシリア オルコットとシャルロット デュノアとラウラ ボーデヴィツヒで隣の1-2には凰 鈴音が居る。

ただ今一夏は落ち込みモードに入ってる。

その理由は昨日ようやく自分でも使えるトイレが寮に出来たのにあつという間に壊れてしまった為またしばらく更衣室のトイレを使うしかなかった状態である。

篤「(一夏のやつ・・・顔が暗い何かあったのか?)」

セシリア(以下:セシ)「(一夏さん・・・一体なにかあったのかしら・・・)」

シャルロット(以下:シャ)「(一夏・・・どうしたんだろ・・・何かなぐさめに何かしようかな)」

ちなみにラウラは『嫁を元気にする方法』を考えていた。

丁度そのとき一夏の担任でラウラの教官で一夏の実の姉 織斑 千冬と一夏の副担の山田 真耶が入ってきた。

千冬「お前等席に座れ。ショートホームルームを始める。」

千冬の言葉に反応して生徒達は席に座った。

山田「今日は転校生を二人紹介します。」（少々困り顔で）

転校生が二人くる。

今から五分前

1-1の教室の前の廊下

宗は一夏のクラスメイトになる。

その理由は千冬が『男が一人だと寂しい気持ちになりそうだから一夏のことをよろしくたのむ』だそうだ。

千冬「宗、お前以外に転校生が一人くる。よかったらそいつの面倒を見てくれ。」

そいつって千冬は一人の女子の肩を叩いた。その女子を見て宗は、

宗「お前は!?!」（低い声で）

女子「？」

驚いてた。その理由はその子はかれの妹、真由にそっくりであった。だが

宗「（いやまで・・アイツがここにいるはずがない。姿形はそっくりでも雰囲気ですこし違う。）いや・・すまない、君が俺の知り合いにそっくりだからつい・・」

女子「そうなんだ」

宗「それよりも千冬先生。」

千冬「学校では織斑先生と呼ばばか者」

宗「あっはい。織斑先生、俺と・・えっと・・」

女子「自己紹介がまだだったわね。私は暁月リオ。『リオ』って呼んで」

宗「俺とリオはどのクラスに入るんですか？」

千冬「お前等のクラスは、私が担当しているこのクラスだ。」

千冬はそう言うと親指で1-1をさした。

千冬「お前等私が呼ぶまでここでまっててろ。」

二人「はい」

そして今に繋がる

千冬「二人とも入って来い。」

千冬に呼ばれて宗とリオは入ってきた。

宗「黒金宗だ。今後よろしくたのむ。」

リオ「暁月リオです。みなさんよろしくおねがいします。」

二人が自己紹介をしたあと少しの間しんと静まりかえった。

宗「……うんここは何か言わなければいけないのか」

「き……」

宗「き？」

女子全員（篝・セシリア・シャルロット・ラウラ以外）「きゃあああああああああああああ！！！！」

1・1の女子たちは宗たちが来たことに大喜び。否、大絶叫していた。

「ついにきたー！男子二人目！！」

「しかもイケメー！！」

「隣の子もかわいいー！！！！」

千冬「んっん！！」

千冬の咳払いで再び静まりかえった。

千冬「お前等仲良くしろよ。二人とも空いてる席にすわってくれ。」

二人「はい」

千冬「それから織斑、篠ノ乃二人の面倒を見てやってくれ。」

一夏と箒「はい」

一夏「あらためてよろしくな。俺は織斑一夏。」

箒「私は篠ノ乃箒だ。よろしく。」

リオ「こちらこそよろし。」

千冬「では一時間目はISの授業だ全員グラウンドに集合！」

全員「はい……！」

次回につづく

模擬戦一夏VS宗（前書き）

タイトルではそう言ってるけどまだ戦ってないんですけどね。

模擬戦一夏VS宗

男子更衣室

二人「ぜえ・・・はあ・・・ぜえ・・・はあ・・・」

二人がなぜ息を切らしてるのか。それは、今から五分前になる。

五分前・廊下

一夏と宗は急ぎ足で男子更衣室にむかった。

その理由は、一時間目はISの授業で担当は千冬である。つまり一分でも一秒でも遅れたら千冬の鉄拳制裁を喰らうことになる。

二人はそうならないようにするために走っていたが、ここで難関の壁が来た。それは大勢の女子と、新聞部のまゆずみかおるこ黛薫子がいたからだ。

「あー！ー転校生はっけーん！」

「みんなー！ー！困んで取り押さえるー！」

一夏「しっしまった！」

宗「おいおい！困まれたぞ！どうする！？」

薫子「みんなどいてどいて！私は新聞部の薫子です。転校生の宗さんにか今の気分は？」

薫子が質問してきたが、この時宗は自己防衛モードが発動していた。

ただこの時の宗は、

宗「すまないが今は・・・俺たちに質問するな」

何故かキャラが変わっている。

宗がそう言つと一夏の服をつかんでそのまま女子たちを、

一夏「え？」

女子たち「え!？」

飛び越していった。

前にも言つたとおり宗はスポーツ万能で女子の上を跳び越すのはおそらく朝飯前である。

そしてそのまま二人は全力疾走で更衣室に向かいそして今につながる。

男子更衣室

宗「ぜえ・・・はあ・・・一夏・・・お前大丈夫か？」

一夏「それはこちらのセリフだよ。さっきお前キャラ変わったけどどうしたんだ？」

宗「ああ・・あれか・・。実は俺・・自分に危機感が襲い掛かると自己防衛モードが発動してそのときのさいに人格が一時的に変わってしまうんだよ。なんでそうなるのかはわからないけどね。」

一夏「そうなのか。・・・やべもうこんな時間だ早く着替えよう」

宗「あっああ分かった。」

二人は急いでISスーツに着替えた。

一夏は着替え終わったら宗の方をみた。

一夏「そのスーツ・・なんかカッコいいな。」

一夏は宗のISスーツを見て関心したような言い方で宗に言った。

宗「ああこれか。クロガネカンパニー社が作ったスーツだ。見た目以上に動きやすいぞ。」

一夏「クロガネカンパニー？そっいえばお前、苗字がく黒金>だったな。もしかしておまえ。」

宗「ああクロガネカンパニー社長の子（本当はただの保護者）だ。」

一夏「へえー。てことはお前も専用機を持っているのか？」

宗「持つてるぜ。第よ・・第三世代のISが。」

なぜ宗は第四世代の自分のISを第三世代と呼んでる理由は、シンが『この世に第四世代はお前のを含めて三機ある。へたに第四世代とよぶとデータを盗むヤツが出るかもしれないから一時的なリミッターを付けておいた。性能は第三世代と変わらないようにしてある。だからリミッターが取れるまでは第四世代とは呼ばないようにしろ』だそうです。

一夏「へえーそうなんだ。」

宗「それはともかく時間は大丈夫なのか？」

宗の言葉に反応して一夏は時計を見た。

授業が始まるまで後一分

一夏「げえ！！ヤバイ！！宗、急がないとやばいぞ！」

宗「わかってる！」

二人は再び全力疾走でグラウンドまで走った。

グラウンド

二人はギリギリ到着した。

千冬「よし全員そろったな。」

全員「はい!」

千冬「よし。織斑、黒金」

一夏・宗「はい!」

千冬「お前等、戦ってみろ」

一夏「ええ!？」

宗「織斑先生どういことですか!？」

千冬「なに興味本位だ。あいつが作ったISとクロガネカンパニー製のISどちらが強いか少し気になる。」

宗「……やるか一夏」

一夏「そうだな。」

二人はクラスの前に出るとそれぞれISを起動させた。

一夏「来い雪羅(せつら)!」

一夏がISの名前を呼ぶと一夏の体にISが装着された。

宗「それがお前の専用機<雪羅>か。・・なら俺も呼ぶか。」

宗「来い！ライジングジョーカー（轟く切り札）！！」

宗がISの名前を呼ぶと宗の体にライジングジョーカーが装着された。

それを見た女子たちは、

「かっこいいー！」

「赤に黒って似合ってるー」

などと感想を言っていた。

次回を待て

模擬戦一夏VS宗（後書き）

次は戦闘です。

感想まってまーす。

模擬戦一夏VS宗 / 2

一夏「それがお前の専用機・ライジングジョーカーか。」

宗「ああ。だがいきなりお前の雪羅とやりあうことになるなんて思ってもなかったぜ。・・まっおしゃべりはここまでにしてそろそろ始めるか。」

一夏「わかった。・・いくぞ!」

一夏は宗に接近してそこから雪片仁方を展開させた。

一夏「うおおおお!」

宗「ふん!」

宗はブラックソードを出してそのまま一夏とつばぜり合いになった。

一夏「んっぐぐぐ。・・」

宗「ぐ。・・。(このままだと経験豊富の一夏につばぜり合いで負けそうだな。・・なら。・・はあ!」

一夏「なに!?!」

宗はなんと一夏の雪片仁方をブラックソードといっしょに上へ飛ばしたのだ。

宗「スキあり！」

一夏「なっ！」

ほかのみんな「え！？」

その後宗はなんとISで肉弾戦をしていたのだ。

そしてその時宗は一夏の顔を（シールドバリアーはあるけど）殴った。

一夏「うわ！」

宗「まだまだ！」

それから宗はとことん殴る、蹴る、打ったたくを繰り返した。

一夏「だ・・だったら！」

宗「ぐわ！」

今度は宗が一夏に殴られた。そして自然のうちにお互いが殴りあいになっていった。

そしてまわりからみてこの光景を『男同士の殴り合い』となぜかしていた。

宗と一夏はいったん間合いをとってお互い飛ばされた（宗の場合飛ばした。）雪片仁方とブラックソードを手に取った。

宗「なかなかやるじゃないか一夏」

一夏「そっちな宗」

宗「だったら俺はこれでいくぜ！」

そういつて宗はブラックソードを展開させた。するとそこから光の刃が出てきた。

一夏「それって・・・」

宗「まあ・・・お前と同じバリア無効化攻撃だな・・・行くぞ」

宗がそういつといきなり一夏に向かってきた。

一夏「おっと！」

一夏も防御体形に入った・・・だが、

宗「甘い！」

一夏「な!？」

なんと一夏を飛び越したのだ。

箒「飛んだ!？」

宗は着地したのと同時にそのまま一夏を×印を描くように斬り、止めにはそのままたてに斬った。

その攻撃で一夏は戦闘不能となった。

千冬「勝負あり！宗なかなかやるじゃないか。」

宗「どうも。ところで一夏大丈夫か？」

一夏「あっああ大丈夫」

一夏がそう言うと宗の手を借りてそのまま上がり結局この時間は一夏と宗の模擬戦で殆ど使ってしまった。

そしてこの後、宗は女子たちに質問攻めにあつ羽目になってしまいました。

次回に続く

模擬戦一夏VS宗ノ2(後書き)

やべ・・・俺戦闘シーン書くの苦手だった。

感想まとめてます。

休息と自己紹介（前書き）

一月ぶりです。

休息と自己紹介

次の日

この日は土曜日だったので学校はお休み。

一夏は宗の部屋にいた。

主な理由は、『雪羅一機でも勝てる方法を教えてやる。』と宗が言ったからである。

宗の部屋

二人は丸テーブルの近くにあるイスに座っていた。

宗「まずお前の機体である白式またの名を雪羅は格闘攻撃に特化した機体である。」

一夏「うん」

宗「んで第二形態になったことによって雪片仁方だけでなく多機能武装腕<雪羅>が加わったということだな。」

一夏「ああ、第二形態移行は福音事件の時になったんだけどな。」

宗「んまあお前に聞いた話を整理すると、『白式は雪羅になった

ことで強くなつたけど燃費が激しく消費しやすくなつた。』『ゆえに攻撃すべてに零落白夜れいらくびやくやによるバリアー無効化攻撃が可能になつたがそれでもエネルギーの消費は激しくなつた。』だな。」

一夏「大体は合ってる。だから雪羅が本来の力を発揮するには筈の専用機『紅椿』の単一仕様能力ワンオフ・アビリティ『絢爛舞踏』けんらんぶたうが必要なんだ。」

宗「お前の機体はエネルギーを犠牲にして攻撃しているから、逆に言えばバリアー無効化攻撃を止めの一撃のみ使用して、それ以外は使わなければいいだけだよ。」

一夏「でもそれじゃあ雪片仁方の普通の攻撃以外何もできないんじゃないあ。」

宗「もし俺が雪羅の使い手だつたらこう使うかもな。零落白夜のシールドは主に緊急時に使って、射撃は相手のかわしくいところ
で撃つかもな。」

一夏「なるほど、その手があつたか。」

宗「俺が考えるにお前にちょうどいい特訓は、『飛んでくるボールを回避する』かな」

一夏「え？なんでISにボールが必要なんだ？」

宗「分かりやすく言うと飛んでくるボールを相手の射撃攻撃だと思えばいいんだよ。」

一夏「それでどうなるんだ？」

宗「さあ？それはその人次第じゃないかな？」

一夏「ああ、なるほど・・・お前の解説わかりやすいな。」

宗「それは単純にお前の頭はくバカだからじゃないか？」

一夏「え？・・・」

二人がこんな会話をしてるうちに、コンコンつとノック音が聞こえた。

宗「ん？誰だろう？・・・一夏少し待ってる。」

一夏「ん？わかった」

廊下

宗が扉を開けると廊下には、箒とセシリア、鈴とシャルロット、ラウラとリオがいた。

宗「箒か・・・それとイギリスとフランスとドイツのそれぞれの代表候補生とリオか・・・そのツインテールの子は？」

宗は自分のクラスの子の顔は大体覚えてたがまだ自己紹介などはしていなかった。（箒の場合顔と名前だけ）それに鈴は2組なので宗ははじめて合う

セシ「そういえばまだ自己紹介がまだでしたね、わたくしはセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生ですわ。」

鈴「私は凰 鈴音（ファン リンイン）。中国の代表候補生よ。」

シャ「僕はシャルロット・デュノア。フランスの代表候補生。」

ラウラ（以下：ラウ）「ラウラ・ボーデヴィツヒだ。ドイツの代表候補生だ」

四人が自己紹介した後に宗は四人のことをこう思っていた。

宗の回想内

セシリアの場合

「お嬢様って感じがする。」

鈴の場合

「見た目の割には激しそうだな。」

シャルロットの場合

「・・・ボクっ子?・・・」

ラウラの場合

「軍人か?」

宗の考えはあながち間違ってたなかった。

~~~~~

宗「んで俺になんか用か？」

リオ「五人とも一夏を探しているんだけど・・・知らない？」

宗「ああ・・・一夏なら俺の部屋にいるぞ。どうせならあがるか？茶ぐらいしか用意できんが。」

シャ「え・・・いいのかな？」

宗「問題ない、さっきまで一夏と一緒にどうやってたら強くなれるか考えてたし、頭が複数あれば発想も広がるしどうする？」

リオ「それじゃあ・・・」

六人「ooooooooooooお邪魔します。」「」「」「」

## 宗の部屋

宗たちが部屋に入ると女子六人は啞然とした。

その時の表情は一夏がはじめて宗の部屋に入った時と同じだった。

鈴「すごいすぎる……。」

セシ「わたくし以上ですわね……。」

一夏「あれ、箒？それにみんなどうしたんだ？」

シャ「一夏が部屋に居なかったからみんなでさがしてたんだ。」

ラウ「それに宗が『一夏と一緒にどうやったら強くなれるか考えてた』とっていたからな。」

箒「何か考えたのか？」

一夏「ああ、それはな……。」

一夏と宗は箒たちに考えたことを全部教えた。

箒「竹刀を使った真剣白刃取り……。」

セシ「ボールを使った射撃の回避……。」

鈴「意外とシンプルな特訓ね……。」

宗「『暮らしの中に修行あり』……俺の先祖が遺した言葉だ。それはそうとお前等何しに来たんだ？」

リオ「ああ！忘れてた！」

シャ「じつは僕たち一夏にどんな特訓させようかなって思ってたんだけど……」

ラウ「実は宗にも用があるんだ。」

一夏と宗は二人顔をあわせて「？」の顔をしたら箒たちに顔を向けた。

そして箒たち（リオを除いて）は全員手に持っていたものを同時に出して声をそろえて、

「「「「「決闘を申し込む（みますわ）」「「「「「

と聞いた。

宗「はあ！？」

あまりにもいきなりなことに宗は驚いて箒たちが持っているものを見た。

そこには墨で『果たし状』と書かれた紙があった。

宗「・・・まさか・・・対五でやるのか!？」

セシ「そんなことはありませんわ。」

鈴「ハンデとしてそっちにはリオがはいるわ。」

そう言つて鈴は指差しでリオを指したが宗は少し納得が行かなかった。

宗「ちよつとまで。俺は専用機持ちだが、リオは・・・」

リオ「もってるよ・・・専用機・・・」

宗「え!？」

リオがそう言つと首のネックレスを見せた。

リオ「まだ言つてなかったっけ・・・私は日本人とオーストラリアのハーフでオーストラリアの代表候補生。使つてるISはクロガネ製だけだね。」

宗「(アイツ【シン】か)・・・とりあえずわかった。引き受けよう。」

鈴「ホント!?!」

一夏「おい、いくらなんでも無茶じゃあ・・・」

宗「ただし！織斑先生の許可しなかったら取り消しだぞ。」

鈴「大丈夫！ちゃんととってあるから」

こうして宗は一週間後、リオをパートナーにして篝たちの対決を受ける羽目になりました。

果たして勝つのは宗&リオか、篝・セシリア・鈴・シャルロット・ラウラの『篝ちゃんチーム』か。

次回を待て

## 休息と自己紹介（後書き）

ここで競馬ならぬ競ISを行います。

次回の話で誰が最初に止めを刺されるかあるいは最後自滅するか賭けます。

当たった人は運がよければアイデアが採用される（かも）しれないよ。

（ただし一人につき一回のみ）

・黒金宗

バリアー無効化攻撃を持つてるので運次第では勝つか負けるか。

・暁月リオ

経験不足で相手の的になる可能性大!?

・篠ノ乃箒

もともと機動力に長けてるので倒されにくい!?

・セシリアオルコット

中距離戦は得意だけどゼロ距離だとアウト

・鳳鈴音

格闘戦や遠距離戦は大丈夫だけどスピード勝負になったら危険!?

シャルロットデュノア×

遠距離攻撃が多いけどなかなか近づけないから長持ち?

ラウラボードヴィツヒ×

コンビネーションでは負けるが相手一人な圧勝!?

感想もまってまーす。

宗&リオVS箒ちゃんチーム（準備）（前書き）

鈴「なんで箒ちゃんチームなの・・・」

セシ「私のブルーチームの方がまだいいほうですわ！」

ラウ「それなら黒ウサギ二式部隊の方がいいぞ。」

鈴「それよりもドラゴンチームの方がいいよ！」

箒「いや・・・それ以前になんで私の名前が使われているんだ？」

リオ「だったら私が決めようか？」

箒「何に？」

「」「」「どねに？」「」「」

リオ「『ホセリシャラチーム』で。」

「」「」「・・・」「・・・」箒ちゃんチームで良いです」「」「」

箒「なんで!?!?」

## 宗&リオVS箒ちゃんチーム（準備）

あれから五日が過ぎて宗とリオはなかなか箒たちと合うことが出来なかった。

それもそのはず。後二日で箒たちが言っていた決闘の日だからである。

## ―食堂―

箒「ここをこつすればアイツはこちらに視線がいくと思つ。」

セシ「そこを私と鈴さん、シャルロットさんとラウラさんで集中攻撃すれば、」

鈴「たとえ相手が誰であろうと必ず勝てる！」

ラウ「そうになると箒は少しきつくなるが・・・」

シャ「箒、大丈夫？」

箒「大丈夫だ問題ない」

五人のこんな会話をしていた。

そこに昼食ののったトレーを持っている一夏と宗がやってきた。

一夏「あれ？ 箒、みんなここにいたのか。」

シャ「一夏、宗どうしたの？」

宗「見てのとうり昼飯だ。それはそうとお前等（箒たち）に聞きたい事があるんだが。」

その言葉を聴いて箒たちは少しあせりを感じた。その理由は、

鈴「（もしかして・・・）」

セシ「（作戦が・・・）」

ラウ「（ばれた!?!）」

と思っていたが宗は、

宗「俺に決闘を申し込んだ理由を五日前聞きそびれたから決闘を申し込んだ理由を聞きたい」

だそうです。

箒「あ・・・ああそれは・・・」

ラウ「嫁の敵討ちだ。」

箒は言うのを戸惑ったがラウラがストレートに言ってしまった。

鈴「ちょ……」

宗「嫁？……嫁って誰？」

ラウ「一夏だ。」

宗「お前（一夏）……いつ結婚したんだ？」

宗も思わず聞いてしまった。

一夏「いや結婚してないし！」

それを否定する一夏

セシ「ホントですか？」（低い声で）

鈴「嘘だったら殺すからね。」（ヤンデレ風に）

一夏と宗が箒たちを見ると、箒は思いっきり顔が怒っていて、セシリアと鈴は目がヤンデレになって、シャルロットは顔は笑ってるけど内心怒ってる。

一夏「ホントだって俺はまだ結婚してないし！」

ラウ「一夏……まだ嫁としての自覚が足りんのか」



宗「一夏の敵討ちの理由は二日後の後に聞くよ。」

一夏「え・・・いいのか？きかなくて」

宗「・・・どうせ聞かせるのはずかしいんだろ。聞かないほうがいいだろ。」

宗はいつの間にか昼食を食べおえていた。

そしてそのまま退席した。

一夏「・・・いいのかなあいつ。」

一夏は宗が大丈夫か心配していて、

筈たちは、少しホットしていた。

そんだこんだであつという間に時が進み約束の日が来た。

ーピッー

宗「リオ準備はいいか？」

リオ「いつでもOKだよ。」

この時すでに宗はライジングジョーカーを、リオは銀の月光（シルバームーンライト）を装着していた。

宗「よし、いくぞ！」

リオ「OK！」

ーアリーナー

宗「またせたな」

篝「こちらも来たばっかだが。」

セシ「それよりもそろそろ始めますか？」

宗「そう言うと思った。ただしやるからには……

……ぜんりよくでかかって来い。」

その言葉で宗の声色が少し変わった。

鈴「当然でしょ！核の違いを見せるんだから！」

宗「正確に言えば『経験の差を見せ付けるから』だな」



**宗&リオVS篝ちゃんチーム(準備)(後書き)**

感想をまっています。

(とうとうより感想をくれ)

宗&リオVS第ちゃんチーム 前編(前書き)

ようやく更新できた。

## 宗&リオVS箒ちゃんチーム 前編

試合開始と同時に宗はまず右手にブラックソードを、左腕にシールドアームを展開させて箒に先制攻撃を仕掛けた。

宗「うおおおおお！」

そして箒もそれに対して雨月と空裂を展開させて宗の攻撃を受け止めた。

箒「ふん！」

宗と箒はつばぜり合い状態になった。

宗「やるな箒。」

箒「そつちもな。」

だが宗と箒がつばぜり合いをしている時に宗の周りをセシリアのビットが囲んでいた。

セシ「この状態なら防御は出来ませんね！」

そしてそれに乗じて鈴の衝撃砲、シャルロットのショットガン、ラウラのレールカノンも照準を宗に向けた。

これが箒たちの考えた作戦。

まず宗が箒とつばぜり合いの状態にさせて、その後には遠距離武装による集中攻撃をしかけるのである。

もともと宗のISライジングジョーカーは近距離攻撃と機動の両方を特化した機体で防御は今展開させているシールドアームのみである。

ゆえに今の宗のISはリミッターを付けられているので本来の性能を完全に発揮することが出来ない状態である。

宗「!・・・なるほどな箒自らが囿になって俺をひきつける、そのスキに他のみんなが俺を集中攻撃するってわけか。・・・やるな」

鈴「減らず口は!」

ラウ「後から言え!」

箒以外の四人による集中攻撃が始まると同時に箒はその場からすぐ離脱した。

宗「やべ・・・リオ!」

リオ「分かってる!」

四人の攻撃が宗に届く前にリオはスカート状態になっている六個のビットを宗の周りに移動させてそれぞれのビット同士が互いにビームを放ち何か結界に似た物を作り四人による集中攻撃から宗を守った。

さすがに見たことが無いやり方だったので鈴たちは少し驚いた。

鈴「なにあれ!？」

シャ「誘導兵器がシールドを作った？」

リオ「コレが私の誘導兵器、月の爪ルナクローの特徴の一つ、お互いのビームをビームでつないで擬似的なシールドを作り出す。そしてもう一つの特徴はブルー・ティアーズと同じ射撃能力があること！」

四人の集中攻撃が終わると同時にルナクローが箒たちを襲った。

ただしその殆どは回避されたり防御されたりしていた。

セシ「なかなかやりますわね・・・ですがBT兵器は貴方だけが使えるわけじゃありませんわ！」

セシリアがそういつた瞬間、セシリアのスターライトMk???がリオを襲うがリオそれをあえて回避せずそのまま受けた。

だがリオはセシリアの攻撃を受けても全然平気な状態であった。

セシ「!?!なぜ落ちませんの!?!」

それからセシリアはスターライトMk???でリオを撃つが全くひるんでなかった。

リオ「ごめんね私にはBT兵器は通じないよ！」

一方で宗は再び箒とぶつかり合った。

そして箒と同様今宗と戦っているのはシャルロットとラウラである。

宗「いいのかりオ相手にあの二人にまかせて。」

ちなみにリオと戦っているのはセシリアと鈴である。

箒「敵の心配をしている場合か！」

箒が連続攻撃を放っているがすべて防御されてしまう。

宗「悪いが簡単には負けられないんだ。」

宗と箒が再びつばぜり合いになると宗の両肩（の首に近いあたり）に何かが展開した。

ラウ「！箒離れる！」

ラウラそう叫んだがすでに遅かった。

両肩から展開した何かは箒に実弾による攻撃をした。

両肩についてる何かが箒を攻撃した後に宗がそのまま踵落としを仕掛けた。

箒「ぐっ！」

宗「もらった！」

篤「うわあー!!」

宗の踵落として篤はそのまま地面に落ちた。

シャ「よくも!」

シャルロットはグレネード弾で宗を攻撃したがそれは宗の両肩についてる何かグレネード弾を打ち落とした。

これがリミッターを付けられているライジングジョーカーの唯一の遠距離攻撃、<シヨルダーガン>である。

一方でリオたちの方で鈴たちはかなり苦戦していた。

鈴「ぐう!」

セシ「なんですよ」

セシリアがそう言うのも無理はなかった。

いくら攻撃してもBT兵器は役に立たないわ、接近してもビットによるシールドで防御されるは拳句の果てにはあちらの遠距離攻撃をうけているのである。

リオ「一応言っとくけど私のISの装甲は全部吸収装甲ドレインで出来てるからBT兵器は無意味だよ!」

吸収装甲、正式名称BT兵器無効吸収装甲（BKD）

相手の放つBT兵器を無効にしてそしてソレを自らのシールドエネルギーに変換して回復する装甲である。

リオ「（でも吸収<sup>コレ</sup>装甲にも欠点があるんだよね）」

リオがセシリアと鈴とやりあつてるときに鈴が衝撃砲で攻撃したのでそれを受けずに回避したのである。

そのわけは吸収装甲はあまり高質量のBT兵器（例えば鈴の衝撃砲）は受け止めきれないのである。

鈴「だつたらコレならどう!？」

リオ「!？」

リオもさつきまでは気づかなかつたがリオの近くには箒を除く四人が困んでいた。

宗「!?!?リオ!?!?くう!?!？」

宗は今すぐリオを助けたいが今箒とつばぜり合いになっているので助けることが出来ない。

シャ「防御の硬いシールドでも」

ラウ「一点に攻撃を仕掛けたらどうなる？」

ラウラがそう言った瞬間、セシリアたちのすべての遠距離攻撃が一点に集中攻撃をしかけようとしていた。

リオのルナクローによるシールドでも一点に集中攻撃されたら何時まで持つか分からない。

宗「（くそ！・・・どうする・・・どうする・・・どうする！？・・・！こっとなったらコレしかない！！）」

何かを思いついた宗はブラックソードの柄を強く握り締め箒をそのまま（自分から見て）前方に箒を押しした。

宗「うおおおおおおおおお！！！」

箒「何！？」

そしてそのまま加速し地面まで後十メートルあたりまで押し宗は箒の両月と空裂をブラックソードごと飛ばした。

宗「ふん！！！」

箒「しまった！！！」

そして宗はリオを助けるために・・・

なんと・・・

箒を踏み台にしてそのままリオのところまで加速した。

それにより箒は踏み台にされたのでそのまま地面に落下。

そしてセシリアたち一斉攻撃がはじまった。

宗「くそ！・・・間に合わない！・・・もっと早く・・・  
イグニッション・ブースト  
瞬時加速よりも早く・・・もっと早く！」

宗がそう思っているとき宗の頭の中にこんなことを思っていた。

~~~~~

．．．．なぜ早く移動したい．．．．

それはリオを守りたい

じゃあ何故守りたい

こんな疑問が頭の中から出てきた。

そして宗は頭の中でこう答えた。

それは・・・大した理由はない・・・

だけどそれでも・・・今は・・・

彼女を守りたい!!

~~~~~

そしてセシリアたちの攻撃があと少しでリオに所に来た。

リオ「くう!!」

セシ「おわりですわ!!」

そしてセシリアたちの攻撃がリオに届いてしまった。

シャ「はあ・・・はあ・・・はあ・・・少しやりすぎだったんじゃない？」

鈴「別に良いんじゃない？まあ確かに少しやりすぎたけど・・・」

ラウ「ソレよりもまず箒の援軍に行かねば」

セシ「そうですね・・・箒さん大丈夫ですか？」

箒「私は・・・大丈夫だが・・・」

セシリア心配して言ったが箒は何か疑問に思ったことがある。

ラウ「どうしたんだ箒？」

箒「・・・宗の姿が見当たらない・・・」

箒のその言葉によりセシリアたちも周りを見た。・・・が何処にも宗の姿が見当たらない。

セシ「どこにも見当たりませんね。」

鈴「もしかして・・・負けるとわかって逃げたんじゃ・・・」

「誰が逃げたって？」

その時宗の声が聞こえた。

声の元は先ほどセシリアたちがリオを集中攻撃した場所だった。

そこには無傷のリオをお姫様抱っこしている宗がいた。

セシ「な・・・なぜ無傷ですの!？」

セシリアたちはリオが無傷であることに驚きを隠せない。

それもそのはずである本来あの距離だったら無傷にならずそのまま直撃したはずなのである。

宗「リオ・・・お前に言いたいことがある。」

リオ「な・・・なに?」

宗「ここから先は俺がやる。だからここから離れてくれ」

だがその言葉にリオはすぐ反対した。

リオ「な・・・何言ってるの!?!一人で五人相手するのはムリよ!」

宗「大丈夫だ、信じる。」

リオ「信じろって何を根拠に言ってるの!？」

宗「……とりあえず今は……」

俺がお前を守ってやるよ。」

リオ「……へ？」

宗「だから今は此処から離れてろ。」

リオ「……う……うん……わかった。」

宗の言葉によりリオはそのまま離れた。

宗「またせたな。」

セシ「あなた、まさか一人でやるつもりですか？」

宗「俺がそう言う理由は……すぐにでもわかる。」

宗がそういった後に宗の右下のディスプレイに「守りたいという気持ちは確認、パワーセープリミッター完全解除」と書かれていた。

それはシンがつけたりリミッターが取れてライジングジョーカーの本  
来の性能が開放されたのである。

宗「さてと・・・」

「こっからが本番だ。」

後編に続く

宗&リオVS幕ちゃんチーム 前編（後書き）

感想を待ってまーす。

ついでにオリジナルIS設定を更新します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4306s/>

---

IS インフィニットストラトス AS<アナザーストーリー>

2011年10月10日06時11分発行